

▶▶▶ 防災・減災・復興の担い手づくりプロジェクト

災害時、自分の命、 そして大切な人の命・地域を守る人材の育成

▶ プロジェクトメンバー

- 宮定 章（災害科学・レジリエンス共創センター）
 此松 昌彦（教育学部）
 江種 伸之（システム工学部）
 平田 隆行（システム工学部）
 今西 武（災害科学・レジリエンス共創センター 教育研究アドバイザー）
 有馬 専至（Kii-Plus）
 西川 一弘（Kii-Plus）
 南出 考（Kii-Plus 価値共創研究員）
 林 美由貴（災害科学・レジリエンス共創センター）
 ○はプロジェクト代表

▶ 共創相手

- NPO 法人日本防災士機構
 広川町立耐久中学校
 和歌山県社会福祉協議会

プロジェクトの背景

和歌山大学では、2004年から大学の知的資源を最大限に活用し、自治体と連携しながら地域防災力の向上を推進する和歌山大学防災研究教育プロジェクトを立ち上げた。その後変遷をしながら、2016年「災害科学教育研究センター」として、防災まちづくり・防災地域づくりの提案と地域との協働作業、防災プログラムの開発と実施、防災のための知識・知恵や情報発信等を行い、防災教育に力を入れてきた。2020年度から、紀伊半島価値共創基幹発足に伴い、災害科学・レジリエンス共創センターに改組した。パイロットプロジェクトの柱の一つに「防災・減災・復興の担い手づくり」を位置づけ、これまでの自治体や地域との連携や、防災による知見を活かし、担い手づくりを強化していくことにした。

2020年8月には、和歌山県社会福祉協議会から価値共創研究員として、南出考氏を迎えた。南出氏は2008年に常設の災害ボランティアセンター設置に尽力をされており、本プロジェクトの災害ボランティアステーションの設置や担い手育成のアドバイスを行っている。

プロジェクトの目的

「防災・減災・復興の担い手づくり」では、これまで和歌山大学の研究・教育の知見を活かして、教育機関として、担い手づくりを行い、地域貢献をすることを目的としている。

一つは、学生・教職員の防災力向上に取り組んでいる。さらに、昨今の災害が頻発し、地域社会からも、防災力の強化を、専門知識を持つ大学へ求められており、小中学校や社会人へも防災教育を行い、地域の防災の担い手づくりを行っている。

プロジェクトの活動内容

① 防災士養成プログラム

本プログラムは、正しく災害を知り、災害に備え、災害時に自助、共助によって地域で活躍できる人材の育成を目的としている。2017年より、学部生が一般教育科目や専門科目を利用した講義「自然災害と防災・減災」「防災工学」を受けることで、認定特定非営利活動法人（以下：NPO 法人）日本防災士機構が実施する「防災士資格取得試験」の受験資格を得ることができるようになった。希望者は、大学内で防災士の資格試験を受けることができる。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策のために大学の講義がオンラインになった。オンライン講義では、防災士の受験資格の講義要件を充足できないため、これまでの講義とは、別に対面講座が必要になった。その機会を、防災力アップに生かそうと積極的に捉え、これまで講義の受講できた学部生だけでなく院生や教職員でも受講できるように工夫した。集中講座として2021年3月8日、9日に行い、これまでの講座で一番多い33名（学部生18名、院生2名、社会人受講生6名、教職員7名）が受講した。下記のテーマをカリキュラムとし講義を行った。

- 1.地震と津波による災害
- 2.近年の自然災害
- 3.防災士に期待される活動
- 4.気象災害・風水害
- 5.土砂災害
- 6.災害情報の活用と発信
- 7.8.防災士が行う各種訓練 被害想定・ハザードマップと避難情報（講義と演習）DIG
- 9.耐震診断と補強
- 10.自主防災活動と地区防災計画
- 11.行政の災害対応と危機管理
- 12.災害ボランティア活動



図1 防災士養成講座講義風景



図2 防災士養成講座ワークショップ

終了後、参加者からは、「引き続き防災のことを学びたい」、後日参加できたと知った方からも、「来年度は受講してみたい。」と養成講座は注目されている。

また、3月11日のむすぼら（後述③）設立記念イベントにも、防災士養成講座の受講生が参加した。防災の担い手としての意欲の高さが伺われた。

② 住民が防災意識を高めるための、学校・住民向けの防災教育の教育プログラムの開発

本センターでは、地域の自主防災組織や学校現場で利用される防災教育用のプログラムを、10年以上前から開発してきた。防災への関心を高めるため公共マーケティングの手法を利用して防災を考える『3.11メッセージ報道写真で見る東日本大震災の100日間』という動画を制作し、さらに必要な防災教育プログラムを開発したり、従来の開発したプログラムを改良したりしてきた。特にあまり防災に関心のない人たちに動いてもらうために、どうしたら関心を持ってもらえるかを考え、本プロジェクトでは、過去に和歌山大学が関わった教育コンテンツをできるだけ、冊子などに掲載して誰でもが使えるようにすることを目指してきた。

2020年度は広川町における学校での防災教育、那智勝浦町教育委員会での防災教育実践を取り上げ、記録を冊子としてまとめ、今後の学校や地域で行われる防災教育プログラムとして提供することを予定していた。しかしコロナ禍により、行事が中止となったこともあり、日帰りでの防災訓練を耐久中学校で行った。



図3 新聞紙でのマイトイレづくり

そこで今報告では、防災教育プログラムの宿泊体験事例として、2019年10月9日に行った耐久中学校での和歌山大学で開発した取り組みを紹介する。ここでは防災学習（自助）の一環として、災害時の生活の一部を体験することで自分の命を守る力を身につけることを目的とした。

防災学習のプログラムは初めに、防災学習①『3. 11 メッセージ』視聴で、自分たちの大切な人を守るために自分自身や大切な人を守るために訓練をするという気持ちを高める効果をもたらす。さらに防災学習②避難所運営訓練、防災学習③簡易トイレづくり『トイレが大変』、防災学習④パーティション組み立て、防災学習⑤暗闇体験と楽しみながら防災を学び、できるだけ災害時に合わせて対応できるように行う訓練を行った。その後、講堂で就寝し、2日目は学校独自のプログラムが行われた。



図4 パーティション組立訓練

③ 和歌山大学災害ボランティアステーション(愛称: むすぼら)



図5 むすぼら設立集合写真

和歌山大学災害科学・レジリエンス共創センターでは、東日本大震災から10年をむかえる2021年3月11日に和歌山大学災害ボランティアステーション(愛称: むすぼら)を設立した。愛称の「むすぼら」は、「結ぶ」と「ボランティア」、和歌山弁で勧誘の助動詞「ら」の造語であり、「結びましょう」の意味を持ち、防災に関心を持つ仲間を増やそうとしている。

むすぼらは、日頃から災害を「自分ゴト」と捉える、

現場で学ぶ、被災者に関わる、地元のピンチに立ち上がることを理念として活動していく。

むすぼらのメンバーの対象は、和歌山大学の学生と教職員を構成員としており、いざという時に大切な人を守りたい、人のために何かしたい、助け合える仲間を見つけない、大災害で生き残りたい、そもそもボランティアとは?などという方を募集している。

2020年度は、設立に向けてキックオフミーティング3回を含め4回活動を行った。

2020年10月26日には、防災カードゲーム体験会を行い学生8名(4名×2回)が参加した。

プログラムは、①和大的これまでの災害ボランティア スライドショー、②防災カードゲーム「このつき何がおこるかな?」、③ワーク「むすぼらで何したい?(被災地のニーズに対して自分ができる(したい)こと)」を行った。



図6 防災カードゲーム

12月18日には、防災食体験見学会を行った。コロナ禍の状況でも災害はいつ発生するかわからないため、感染症対策をした上で実施した。内容としては、ポリ袋クッキング、段ボールでピザ窯づくり、アルファ米アレンジレシピ、着火方法、竹の箸づくり、発電機の見学会を行い20名が参加した。



図7 防災食見学会

2021年1月27日には、オンライン・セミナー「大規模地震災害に対する地元大学の備え～石巻専修大学の事例に学ぶ」を行い、東日本大震災で最大級の被災地となった石巻にある石巻専修大学の当時の学長であった坂田隆氏から、災害時の大学の対応や、災害ボランティアについて学んだ。



図8 オンラインセミナー会場

3月11日のむすぼら発足時には、被災地への想像力を高めようと活動した。2月13日に福島県沖地震が発生したため、福島県新地町で活動する「災害救援レスキューアシスト」が、被災家屋の屋根瓦応急措置に活用する段ボール瓦（アシスト瓦）を募集しており、学生・教職員など20名が段ボール瓦を製作した。多くの家屋の屋根瓦がずれたり崩落したりする被害が発生し、業者による修復が追い付いていない状況で、雨漏りでカビが発生している家など、早急な対策が必要になっていることを説明し、被災地へ想いを馳せながらメッセージを書き込んだ段ボール瓦51枚を製作し、福島県新地町へ送った。

今後は、メンバーの興味に合わせながら、スキルアップを図り、持続的にボランティアステーションとして活動することを目指す。



図9 アシスト瓦づくりの説明



図10 被災地へのメッセージを書いたアシスト瓦

プロジェクトの成果

2020年度は、コロナ禍で困難はあったが、防災士養成講座では、例年の学部生だけでなく、院生や教職員、社会人の受講生が、防災士になる教育プログラムを提供する機会となった。学校・住民向けの防災教育プログラムの開発は、宿泊体験をすることは難しかったが、感染症対策をし、日帰りでの防災訓練を行った。むすぼらの活動では、参加メンバーからは、「教員を目指しているので、子どもへの防災教育について参考にしたい」「留学生です。日本で一度でも災害ボランティアを経験し母国に帰って生かしたい」「とりあえず被災地を見てみたい」という積極的な意見が聞かれ、担い手づくりの必要性が感じられた。感染症対策で様々な困難はあるが、来年度も、大学内そして地域社会のニーズに合わせ「防災・減災・復興の担い手づくり」を行っていく。

